

## 15・弥映ちゃんとわたしの夏

『14・真夜中、ここに来るまでと、これからの話』から数日後。

とある年の夏。八月五日（水）十一時すぎ。

日本のとある、かなり寒い地域の政令指定都市。

天気は晴れ。日差しがまぶしい。

気温は二十七度程度。夏らしい午前だ。

場所は、弥映のマンションの前。

あの後、主人公と弥映は、もう数日あの民宿に滞在したのち、この地元に戻ってきた。さすがに、帰る日はずらした。

だが、主人公は本来夏休み中ずつという予定だったところを急遽切り上げ、弥映を追うように帰った。

……その時点で、色々察されているような気はする。

それでも、伯父伯母や主人公の両親は、主人公と弥映が付き合っているだなんて、考え

もしないだろう。

せいぜい

『田舎で出会って、年齢差があるにもかかわらず意気投合した』

『主人公は弥映の事が大好き』

『弥映も、それを受け止め、快く付き合ってくれている』

『珍しい関係と言えは確かにそうだ。』

だが、弥映は主人公と同性だし、身元もしっかりしているし、特に問題ないだろう  
この程度の認識と思われる。

つまり、良くも悪くも、自分達の現在地は『そこ』だ。

今の自分達は、時にこれを利用しながら仲良く一緒に過ごし、絆を深める。

そして、将来的にはこの認識を変え、真の関係を認めてもらう事を目標に生きていくのだ。

だから、今の二人がやる事は意外とシンプルだ。

まず、主人公は学生としての責務をしっかりとこなす。

具体的には成績をさらに上げて『しっかり者の優等生』という評価を、さらに安定したものにする。

次に弥映は、主人公としては、もう少し休んでいてもいいと思うが……早速、転職活動を始めるともらしい。

少しでも早く社会復帰して、再びきちんと稼げる立場になって、主人公にふさわしい人間になりたいのだという。

主人公には、それが、楽なものではない事しかわからない。

しかも、弥映の事だ。

頑張りすぎてしまいそうで心配である。

——だから、自分にできる事すべてで、精一杯支えようと思っている。

という事で本日、主人公と弥映は、数日ぶりに再会した。

弥映の最寄り駅で待ち合わせをして、これから、一緒に弥映の自宅へ向かう所である。

二人とも、たった何日かしか離れていないのに、この時がとにかく待ち遠しかった。

その間、毎日通話したし、メッセージだって送り合った。

新しい一步を踏み出した弥映を、主人公は思いつく限り甘えさせようと、しつこい位絡んだ。

だから、淋しさは感じていなかったのだが……やはり本物は違う。

会ってすぐ、再会を喜び抱き合って、今も手を繋いで歩いているが、それだけじゃちっ

とも足りない。

早く、早く弥映の部屋に入って……また、民宿にいた頃のように交わりたいと……お互いに思っている。

SE1 外の環境音

【最初から流す】

【0―10秒ほどまで流してSE2】

【その後、既定の位置でSE4と切り替わる】

SE2 弥映の足音

【最初から最後まで流す】

【繰り返し流す】

【その後、キャラクターの動きに合わせて止まったり、再開したりする】

【0―1秒ほどまで流して、セリフと重ねる（▲マーク参照）】

【0―5秒ほどまで流して一度止まる】

弥映、歩きながら話す。主人公の右隣を歩いている。

● 中央

「自宅マンションを指さして。

※マークまで、声がうきうきしている。

数日ぶりに主人公に会えたのが嬉しくて、はしゃいでいる」  
あ。ここ。

このマンションの、三階があたしんち。

なんもないけどゆっくりしてって♡」※

▲ 1 ここで、SE 2が一度止まる。

SE 3 マンションの扉が開く音

【最初から最後まで流す】

ここで、SE 1と4が切り替わる。

▲ 2 ここで、SE 2が再開する。

SE 4 マンションの環境音

【最初から最後まで流す】  
【ごく小さな音量で流す】

SE5 マンションの扉が閉まる音  
【最初から最後まで流す】  
【背後で少し小さめに聞こえる】

▲3 ここで、SE2が数秒流れたのち、また、一度止まる。

SE6 弥映が玄関のオートロックを解錠する音  
【最初から最後まで流す】

弥映、玄関のオートロックを開錠しながら、主人公にたずねる。

●中央

「【少し不安そうに】  
でもさあ、よかったの？  
ほんとはまだ伯母さん達んといける予定だったんでしょ？」

主人公、このように、早速不安そうにする弥映に、はつきりと答える。

〈主人公〉

「いいの。ラブ優先。

私、これからは愛に生きるって決めたから。

伯母さん達も『またいつ来てもいい』って言ってくれたし」

SE7 オートロックの扉が開く音

【最初から最後まで流す】

【ごく小さな音量で流す】

● 中央

「【嬉しくて照れる】

そっ、か」

すると、曇っていた顔が一瞬で『ばああっ』と明るくなり、それから、安堵したようにほころぶ。

こういう時の弥映は、年下の小さな女の子のようだ。  
なんだかずるい。

……でも、好きだ。可愛い。大変癖になる。

そうだ。主人公は、こういう弥映が大好きなのだ。

軽い女を気取っているくせに、本質はどこまでも重たい。  
年上ぶらない代わりに、年下っぽいふるまいこそが素で。

たくさん甘えさせてくれるけど、甘えるのはもつと大好きで。  
遠慮がちなようで、際限なく求めてくる……。

主人公はそんな弥映に、多少悪さされても、あざといやつだと思わされても、全部許したくなる。

弥映が求める事を全部してあげて、安心させてあげたいと思う。  
それから、絶対誰にも渡さないと思う。

この人を一番幸せにするのは私だ。それだけは絶対に誰にも譲らない。  
と、本気で思う。



● 中央

「嬉しくて声が弾む」

じゃあ、残りの夏休みもずっと一緒だね♥」

二人、エレベーターホールに向かって歩き出す。

▲ 4 ここで、SE2がまた、再開する。

SE8 オートロックの扉が閉まる音

【最初から最後まで流す】

【背後でごく小さな音量で流す】

▲ 5 ここで、SE2がまた、止まる。

SE9 弥映がエレベーターのボタンを押す音

【最初から最後まで流す】

二人、エレベーターの到着を待つ状態になる。

あと、主人公は、弥映と交際を始めてから、一つわかった事がある。

それは『自分らしさ』とは基本的には大切にしつつ、いざとなったら、平気で放り投げてもよいものである。という事だ。

主人公は、自分らしさを大切にした結果、弥映と『ワンナイトの関係』ではなく『恋人』になった。

これは、自分らしさの勝利である。我ながらよくやった。と思う。

だが、その自分らしさを見つめ直した結果、この通り、十日ほど前の自分では考えられない『エロい話大好き』の『いつも恋人とべたべたくっついてる』『バカツプルの片割れ』になった。

その結果、今、感じた事がないほどの幸せを享受している。

つまり、自分らしさは、どんどん都合の良いものにしていいのだ。

迷った時は、自分らしさに頼る。

だが、自分らしさを捨てる事でよりよい結果が得られると感じたら、その時はポイしてもよい。

その時その時で、もっとも自分にとってベストの未来を得られるよう、考えながら行動

する。これが一番なのだ。

という事で、今の主人公は性的な話題が大好きだ。

もちろん、だからといって学校の友達と性についてオープンに話したり、弥映との関係をSNSに綴ったりしてみようなどとは、まず考えない。

基本的にはこれまで通り『エロい話NG』の真面目キャラで生きていく。

だが、いやらしい事で頭がいっぱいの自分を、以前よりも許せるようになった。

それもそれで自分であり、社会的に問題を起こしたり、法律に触れたり、他人や自分を傷つけたりする事がなければ、楽しむのは問題ない。

たとえば数ある趣味の一つと捉えて、常識の範囲で……すでに多少常識をはみ出してる気がしないでもないが、まあそれは置いておいて……とにかく、エンジョイしてもよいと思えるようになったのだ。

そうだ。主人公はずっと、今みたいな自分になりたかった。

周囲が想像する自分とはかけ離れていても、最初はそれをする事に抵抗があっても。

本当は、大好きな恋人と呆れるほどいちやいちやして、他の人とはとてもできない事をしたり、話したりして、愛情の交換がしたかった。

それができる今を、とても幸せに思う。

だから……。

### 〈主人公〉

「ふふふ。夏休みどころか、これからはずっと一緒だよ？

私、一生弥映ちゃんの事、淋しくさせない。

それから、今後はもっと弥映ちゃんのパートナーとしてふさわしくなっていくからね。  
将来的に弥映ちゃんのご両親に認めてもらうためにも、頑張るから」

### ● 中央

「『すごく嬉しい。『パートナー』という言葉に感激している』

……だね♥ この夏はお互い励まし合いながら、レベル上げ頑張る♥」

SE10 下りエレベーターが到着する音

【最初から最後まで流す】

SE11 エレベーターの扉が開く音

【最初から最後まで流す】

ここで、エレベーターが到着する。  
主人公と弥映、一緒に乗り込む。

ところで……。

例の、弥映にちよつと似ている女優さんは、秋ドラマのヒロイン役をやるらしい。  
それはカップルの日常を描いた料理ものだそうで、人の生死とかはまず話題になりそう  
もない、平和な内容なのだという。

彼女自身、新境地だと言っていたが……。

もしその作品がヒットしたら。彼女は今後は、そんな、幸せな世界観で暮らすキャラク  
ターを演じる事が増えるかもしれない。

つまり『夢い』とか『消えてしまえそう』とか『作中で死んでしまう事が多い』なんて  
イメージも、時とともに変化する。

作中死亡率は50%をピークに、今度は下がり続ける可能性があるという事である。

▲6 ここで、SE2がまた、再開する。  
3秒ほど流す。

▲7 ここで、SE2がまた、一度止まる。

SE12 エレベーターの環境音

【最初から最後まで流す】

【繰り返し流す】

【トラック終了まで流す】

【ごく小さな音量で流す】

乗り込んで数秒後、会話が再開する。

弥映、再び話し始める。

SE13 エレベーターの扉が閉まる音

【最初から最後まで流す】

● 中央

「【少し真面目なトーンで】

そうだ。それでね。これからなんだけど。

【少し間をあけてから。】

これを打ち明ける事に対して、少し緊張している」  
とりあえずあたし、仕事探そうと思って。

【普段のテンションで、一見何事もないように話す。

だが、内心少し不安】

いきなり全部はうまく行かないと思うけど。

少しずつやり直してみる」

〈主人公〉

「そっか……」

やはり、弥映はもう就職活動を始めようだ。

主人公、一瞬『もし自分がそれを経験していたら。せめてアルバイト経験があれば、もつと弥映の気持ちを理解できるし、アドバイスもできるのに……』と思う。

またすぐに自分の足りないところを見つけて、不安になりかける。

でも……。

● 中央

「声が明るくなる。」

これからの事に不安がないと言えは嘘になるが、主人公がいれば大丈夫なような気がしている」

それに、もし、しんどい事があってもさ。

あんたがそばにいてくれるもんね♥」

弥映はそんな事、少しも気にしていないようだ。

これから大変なのは弥映なのに、主人公の方が泣きそうになった。

弥映は主人公の足りないところじゃなくて、足りているところを見てくれる。だったら、主人公のする事は一つ。

最初から決めていた事を、予定通り遂行するのみだと思った。

### 〈主人公〉

「そうだよ。何があってもそばにいる。」

そばにいて、弥映ちゃんの事、助けるから」

主人公の言葉に、弥映が微笑む。

主人公もそうして、二人の間に柔らかな空気が流れる。



●中央

「照れ笑いして」

……うん♥

「すごく嬉しい」

ありがとう。

「少し間をあけてから。」

少し真面目な声になって」

あんたのお陰で、今、生きてる事がほんと楽しい」

〈主人公〉

「私も♥ 弥映ちゃんがいるから、今、毎日楽しいよ」

●中央

「すごく嬉しい」

ふふふふ♥」

〈主人公〉

「ふふ♡」

こうして主人公と弥映は、エレベーターの中で微笑み合う。すごく幸せな気分だ。

……ところで。女優さんの話に引き続いて、もう一つ、ところで。

主人公、思う。

真面目な話が落ち着いて、安心した途端に、脳が邪念に支配され始めてきた。

——それにしても、弥映ちゃん、相変わらず、めちやくちやいい匂いする。

外にいる時は意識しなかったけど、こうして、狭い場所で二人でいると、ふわっと、弥映ちゃんの匂いが漂ってきて……わかる。

私、これをかいでると、民宿にいた頃の事ばかり頭に浮かんで……。

正直、したくなってきたやう。

今すぐ抱き着いて、もっとかぎたくなっちゃう。

あーもう！ 何考えてるんだろう。

自重しないと。……最低、あと一時間位は。

だが、そんな事を考えていると、ふと、弥映がこちらの顔を覗き込んできた。それから嬉しそうに笑って、話し始める。

●中央

「【にやにやと切り出す】

そうだ。実はさあ。

【少し間をあけてから】

あたし、すごいタイミング逃して。

あんたに言っていないまま、引っ張ってる事があって」

〈主人公〉

「へ？」

主人公、それを聞いて、途端に身構える。

まだそんな事があったのか。

さすがにもう、先日の『田舎に來た理由』よりも衝撃の告白はないだろう。

だが、相手は弥映である。  
急に不安に、心配になる。主人公の心の中は、いつも忙しい。

しかし、どうやら『引っ張ってる事』とは、主人公が想像しているようなものとは、少し違うようだ。

弥映はずいぶんと楽しそうに、にやにやとしている。

ここで、弥映の距離が近づく。

●中央 至近距離

「すごく嬉しい」

実はね」

弥映、主人公の左耳にささやく。

●●左 ささやく ※マークのセリフまでささやく

「ひそひそと、嬉しそうにささやく」

あたしもね、あったの。

【少し間をあけてから】

あんたにプレゼント。

【少し間をあけてから】

あのショッピングセンターで。あんたに似合いそうなアクセ。買ってるんだ」

〈主人公〉

「……そうなの？」

主人公、驚きと嬉しさで目を丸くする。

そういえば、身に覚えがない事もない。

自分はあの日、何か言いかけた弥映を置いて、そのまま靴を買いに行ってしまった気がする。

まったく、あの時の自分はずいぶん余裕がなかった。

そんな事にも気づかないなんて。

そんな素晴らしいものを受け取らずに、一週間以上経過してしまうなんて……。不覚である。

弥映、そんな主人公の言葉に、嬉しそうに頷く。

弥映、主人公の顔を見るために、正面に移動する。

正面から少し頭をおろして、主人公を見下ろす形で、中央の位置でささやく。

●●中央 ささやく ※マークのセリフまでささやく

「ひそひそと、嬉しそうにささやく」  
でね。そのプレゼントなんだけど。

実はあたしの寝る部屋にある」※

弥映、再び、主人公の左耳にささやく。

●●左 ささやく ※マークのセリフまでささやく

「ひそひそと、嬉しそうにささやく」

だから、うち着いたら、すぐ受け取って。

【少し間をあけてから】

それから。

【少し間をあけてから。

ひそひそと、甘くささやく】

※特に聞き手をドキツとさせるイメージでお願いします  
初おうちセックス。しよ?」

〈主人公〉

「……♡」

SE14 登りエレベーターが到着する音

【最初から最後まで流す】

ここで、エレベーターが目的階に到着する。

●●左 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「にやにやと、からかうようにささやく」

あ、着いた♡」

SE15 エレベーターの扉が開く音

【SE11と同じ音】

【最初から最後まで流す】

そのまま扉が開いて、弥映の部屋へ向かう道が、一気に開かれる。

ああ、これでは、なんだかさすが、お膳立てされている気分だ……。

弥映、一度扉の方を見つめると、それから、また主人公に向き直る。

そして、左耳にささやく。

●●左 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「ひそひそと、嬉しそうにささやく」

行く。

【少し間をあけてから】

今日も一杯。幸せになろうね……♡

【左耳にキスする】

ちゅ♡「」



主人公、その声に、脳がとろけそうになる。

なんて幸せな誘いだろう。  
そんなの、もちろん……。

〈主人公〉

「うん  
♡」

主人公、照れながらも大きく頷くと、弥映の手を握り締める。  
それから、一緒に歩き出す。

——自分達の甘い夏は、こんな風に、まだまだ続きそうだ。

それが、二人にとって来年も再来年も続く、永遠のものになるかは……。  
これからの二人にかかっているけれど。  
それを明るくするための一歩を、今日踏み出すのだ。

主人公、エレベーターから出て、廊下を歩く。

するとそこへ、夏のまぶしい光がいつぱいに降り注ぐ。

思わず目がくらんだが、構わずに手を繋いで進んでいった。

ここでフェードアウトして終了。

(おしまい)